Workers

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｏｒｋｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ３０６２Ｃ

【作者名】
雨永祭

【あらすじ】
困ったことが起きたならいつでもご連絡下さい。ペットの世話から意趣返しまで、ありとあらゆることをお引き受けいたします。連絡は喫茶『Ｗｏｒｋｅｒｓ』まで

志賀早月〈1〉―遭遇：Ｄｅｔｅｃｔｉｏｎ―（前書き）

えー、何ていうか書き改めました。はい。

志賀早月〈1〉―遭遇：Ｄｅｔｅｃｔｉｏｎ―

幼い頃から余計なものばかり見ていた。
それは他人には見えず、理解しがたいもので、それは血の繋がった家族にもそうだった。
おかげでいらない苦労ばかりしたように思う。だって、他人と違うということはそれだけで悪だから。周りと違うということはそれだけで罪だから。だから、見えても気にしてはいけない。気付いても気にしてはいけない。あくまで普通でいないといけない。周りと一緒でなければいけない。
自分は、あくまで背景だ。
それでも、それを続けていくことは出来なかった。
ただの偶然。
俺の生き様はたまたま、変わることになってしまった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

その日、志賀早月（しがさつき）は、たまたま母親にお使いを頼まれた。面倒と思いながらも近所のスーパーまで足を運ぶ。さっさと用を済ませ、家まであと少しのところまで来た時、大気が震えた。
「ウォオオオッ！」

「っ！？」
耳をつんざく咆哮。早月は身を竦めて耳を塞ぐ。
（なんだ？）
普通ではない。日常でこんな獣じみた音を聞くことなど有り得ない。
そして気付く。道行く人の視線。身を竦めて辺りを見る早月に怪訝な顔を向けている。
（ああ、またか……）
いつものことと割り切って、早月は再び歩き出した。
獣の叫びはなおもどこからか響いてくる。自然、歩調が早まる。
穏やかな雰囲気は微塵も無い。
不意に、叫びが消えた。
手のビニール袋の擦れる音がいやに耳に響く。
人がいない。
背後に、何かがいる。
明らかに人のものではなかった。
「ウルルルル……」
振り向くとそれは唸っていた。
街中にいる動物としてはあまりに大きい。ライオン程の大きさがある。何より、その容貌が異様。
人の顔を持ったライオン。
頭は人、体はライオン、尻尾がサソリの怪物。
（なんだよ……これ……）
緩慢な動きで怪物が一歩踏み出す。
「……あ？」
間抜けな声と同時に早月はその場にへたり込んだ。
腰が抜けて動けない。
怪物の口から涎が零れる。
喰われる。
思った刹那に、朗々としたソプラノが響き渡る。

「【Ｍｙ　ｂｌｏｏｄ　ｉｓ　ｃｒｅａｔｉｏｎ　ｉｎｖａｄｅｒ】」
怪物が顔を上げ、それにつられて早月も顔を上げた。
空高く舞っている少女。
「【Ｉｒｏｎ】」
少女の手に光る鉄片。
「【Ｏｂｅｙ　Ｍｙ　ｂｌｏｏｄ，】」
黒く豪奢なドレスと銀の長髪がたなびくその姿は勇ましく、
「【ｒｉｐ　ｔｏ　ｐｉｅｃｅｓ　ａ　ｈａｒｍ　】」
白い肌を血で赤黒く染めるその姿はとても印象的で、
「【Ｂｌｏｏｄｙ　ｓｗｏｒｄ・ＨＡＺＡＫＵＲＡ】」
鉄片に血がまとわりつき、赤黒い刀に変わる。
着地と同時に一閃。
グチャリという音と同時に怪物がバラバラになり、辺りに血が飛び散る。
「依頼完了」
そう呟いたその顔は、早月にとっての日常だった。

志賀早月〈1〉―遭遇：Ｄｅｔｅｃｔｉｏｎ―（後書き）

英語の部分はかなりいい加減です。なら使うなという話なんですけどね……。でも、使いたいっ！
英語が間違ってるとかあれば教えてもらえると助かります。
評価、批評、感想、待ってます。

志賀早月〈2〉―翌朝：Ｓｉｇｎ　ｏｒ　Ｏｍｅｎ―

北和町（きたわちょう）の夜の繁華街に『彼女』は現れた。青いフードに全身を包み、繁華街を闊歩していた。

だからこそ、

「おい、てめえ！」

男が『彼女』に絡んだ。顔は赤く、酒臭い。相当飲んでるようだった。

『彼女』はそんな男の顔に手を伸ばして輪郭を軽くなぞる。顔を近づけると男の口元がいやらしく歪んだ。

「なんだぁ？　誘ってんのか？」

『彼女』は嬉しそうに微笑み、男の手を引いて路地裏に向かう。

ニヤニヤと笑いながら男はついて行く。

路地裏まで来ると『彼女』はスルリとローブを脱ぎ捨てる。

「あ？」

男は目の前の光景に間抜け声を上げた。

『彼女』は微笑んだまま男に抱きつき、男を、貪り始めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フィーネ・クロイツァーは喫茶『Ｗｏｒｋｅｒｓ』のカウンター

席の片隅で頭を抱えていた。
（まずい、不味すぎです。この私がマンティコア程度に手こずったことだけでも不味いですのに、魔法を使ったところを一般人、それもクラスメイトに見られるなんて！）
どうしよう、と頭を抱えるフィーネに『Ｗｏｒｋｅｒｓ』店長のライラ・マクファーデンは苦笑しながらコーヒーを差し出した。
「アンタってあたしたちの中で最年長だっていうのにホント、抜けてるわよね」
「……うっ」
まったくもってぐうの音も出ないフィーネは突っ伏したままそっぽを向いた。見た目相応にしか見えないフィーネがますます可笑しく見えてくる。
でも、と少しばかり不安げな声を上げるフィーネ。
「見られたクラスメイト――志賀早月というのですけれど、一般人、としてもいいのか微妙なところなんです」
「どういうこと？」
「『見えてる』かもしれませんの――」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「おはようございます。志賀早月さん」
「……は？」

朝、学校へ行くために早月が家を出るとそこにはフィーネ・クロイツァーがいた。
銀の髪に白い肌、顔、体、どのパーツを見ても整っていてまるで西洋人形のよう。　そんな中で血のように赤い瞳が際立っている。
そんな彼女がクラスメイトであること以外に接点の無いはずの自分を家の前で待っていたという事態に早月は動揺を隠しきれない。
「え、あ、何……、はい？」
そんな早月の様子に苦笑いを浮かべるフィーネ。
「いきなり来たら、驚きますわよね。でも」
次の言葉で早月の動揺は消える。
「昨日のこと。それから、これからのあなたのことで話したいのですけれど、よろしいかしら？」
その言葉に早月は訝る。昨日のことは言葉通り、怪物等のことで良いだろう。しかし、なぜ、早月自身のこともなのだろうか？
（昨日の怪物はそんなにヤバいものだったのか？）
答えは自分一人では出ない。とにかく、話を聞くしかないだろうと結論付けた。
「いいよ」
こうして、志賀早月は深みへと一歩踏み出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

その一歩は大きく、深く。
ただ『見える』がために。
坂道を転がる石のように。
深みへと。
止まることなく。

志賀早月〈2〉―翌朝：Ｓｉｇｎ　ｏｒ　Ｏｍｅｎ―（後書き）

フィーネの口調が安定しない……

志賀早月〈3〉―魔法：Ａｐｏｌｏｇｙ―（前書き）

フィーネの口調が本当に安定しない。誰だっ、フィーネにお嬢様っぽい言葉を使わせた奴はっ！

志賀早月〈3〉―魔法：Apology―

伊野魅咲（いのみさき）は目の前の光景に驚愕し、手に持った鞄を取り落とした。
「な……ななっ！？」
そこには見知らぬ、しかし綺麗な顔の男子生徒と楽しげに会話するフィーネがいた。
（あ、ありえんっす！　フィーネさんが先輩達以外の男と喋ってるなんて！）
しばらく観察した後、魅咲は携帯電話でどこかと連絡を取り始めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フィーネの説明に早月は顔をひきつらせた。
「……つまり、昨日は本当に、俺は死ぬ寸前だったと？」
「ごめんなさい、私が油断したばっかりに……」
申し訳なさそうなフィーネ。その顔に早月はなんともばつが悪くなる。ついで、ゾクリと背筋に悪寒が走る。
周りに視線を向けると、主に北和高校の男子生徒の視線が早月に突き刺さっていた。
（美人ってのはそれだけで罪というかなんというか……）

嘆息しながらもフィーネに告げる。
「謝らなくていいよ。もう終わったことだし。それより、魔法って、何？」
死ぬ寸前だったことは驚きではあったがそれよりもむしろ、魔法の存在の方が衝撃的だった。
幽霊や妖怪の類のものは早月にとって日常と言って良かった。そのため、マンティコアのような怪物の存在をすんなりと受け入れることが出来た。しかし、魔法はどうにも受け入れ難く、あまりに非現実的なものとしか思えなかった。
とはいえ、これは世間一般からしてみれば幽霊や妖怪の類も非現実的なのだが。
フィーネは早月の質問に質問で返す。
「早月さんは『魔法』ってなんだと思います？」
早月は自分の知識から魔法に関する情報を絞り出す。
「あー……基本は普通の人の力では出来ない不思議なことを起こすこと、かな。漫画やアニメ、ゲームなんかだと、魔力や気を消費して特定の現象を起こすとかね。現実的なところは薬草による治療なんかを魔法――この場合は呪術かな――として見てたよね。あとは、魔法は手間や金がかかるとかね。
まぁ、どれも半端な情報だけどね」
「そんなこと、ありません。意外と当たらずも遠からずですわ」
早月はフィーネの言葉を反芻する。
当たらずも遠からずと言うことは魔法は魔力か何かさえあれば簡単に誰でも出来てしまうものだろうか？
「じゃあ、魔力さえあれば誰でも？」
その質問はすぐさま否定される。
「誰でもってわけでは無いですわね。魔力があっても才能が無ければ使えないですから。
魔法の基本は二つ。『変換』と『支配』。
『変換』は魔力を特定の事象に変えることで、『支配』は魔力で

対象を従わせることですの」
「……ってことは、自分の持つ『力』を直接現象に変えるのが『変換』で、現象を『力』で以て操るのが『支配』か」
フィーネは満足そうに頷き、続ける。
「あくまでもその二つは基本であって、例外はかなり多いのですけれどね。私なんかは『支配』系統に片寄ってるんですけれど」
（ってことは昨日のあれは鉄を魔力で『支配』して操ったってことか？　じゃあ、あの血はなんだ？）
まだよく分からないことだらけだった。

志賀早月〈4〉―当惑：Thinking―（前書き）

短い……

志賀早月〈4〉―当惑：Thinking―

「魔法のことは、まあ、とりあえず分かったよ。それに、昨日のことも。それで、これからの俺のことって？」

フィーネは少し考え込み、尋ねる。

「早月さんは、見えますよね？」

「まあ、一応は」

その後、一問一答の形で話は進んだ。

（カウンセリングを受けてる気分になってきた……）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フィーネは志賀早月について考えていた。

（志賀早月。十七歳。県立北和高校の二年生で帰宅部。私や京、火吹のクラスメイトですけれどこれといった接点などは無く、他のクラスメイトとの交流もほとんど無し。いつも何かしらの本を読むかぼうっとしているかのどちらか。かなり中性的で綺麗な顔立ち。美人の一言につきますわね。成績はかなり良かったはず。性格に関してははっきりとしたことは言えませんね。そして、一番大事なのは『見える』こと）。

フィーネはちらっと斜め後ろの席の早月に目を向ける。早月はぼ

うっと外を眺めていた。その姿が強く印象に残った。
（どうやら『霊視』自体は生まれつきらしいですけれど、『見鬼』まであるかどうかは確認しなければ何ともなりませんわね）
「クロイツァー、教科書百八ページを読んでくれ」
「はい」
当てられたフィーネは思考を中断させ、教科書を読み始めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

（結局、俺の今後についてはわからなかったな……。まぁ、いいか。何か気にしてるようだったけど……）
昼休みになり、早月が朝の出来事を思い返しながら昼食の準備をしていると影がさした。顔を上げると姫野火吹（きのかぶき）が獰猛そうな笑みを浮かべて立っていた。
その後ろには上倉京（かみくらみやこ）が苦笑を浮かべている。
「……何？」
「屋上で一緒に飯食おうぜ？」
早月は首を傾げる。早月にはこの二人とこれといった接点などクラスメイトであること以外にない、と考えたところではたと思い当たった。
（もしかして、フィーネさんとのことか？）
フィーネと二人で登校したことは朝から今に至るまでの間に周知

の事実になっていた。そして、フィーネは目の前の二人とかなり仲が良かった。

「いいよ」

どうにも面倒臭いな、と思いながら立ち上がり、弁当を手に屋上へと向かった。

志賀早月〈5〉―異変：Ｒｏｗ　ａｎｄ　Ｆｉｇｈｔ―

「……でよ、何だって今日はフィーネなんかと登校してたんだ？」
その質問にどう答えるべきかと早月は思案する。火吹はフィーネとは旧知の仲らしいのだが、かといってフィーネが所謂『魔法使い』であることを知っているとは限らない。
早月はとりあえず、はぐらかすことに決めた。
「別に、登校中にたまたま会っただけだよ」
そんな早月に火吹は胡乱な視線を向ける。
「たまたまだぁ？　お前わかってるか？　お前が一緒に登校してたのはただの外人の女じゃねぇ、いい年こいて傍迷惑な天然トラブルメーカーだぞ？
このままだと、お前にどんな面倒事が起こるかわかったもんじゃねえぞ？」
その言葉に、京は焦った声で火吹をたしなめる。
「ちょっと、火吹くん」
「何だよ、京、事実……だ、ろ……」
京の方向き、火吹は凍りつく。
「ふふふ、そう、私は傍迷惑な天然トラブルメーカーですの……」
京を後ろから抱きしめるようにしてフィーネが微笑みを浮かべていた。
それと比例するように火吹の顔をひきつっていた。
そして、フィーネが火を噴いた。
「それは一体どういう意味ですのよ！！」
フィーネは一挙動で京から離れ、その綺麗な脚で火吹の頭の辺りを薙払う。
「ぬぁっ、おま、やっぱ馬鹿だろ！」
火吹は火吹でその蹴りを容易く避ける。
「やっぱとはなんですのっ！」

鋭い貫手。火吹はそれをはたき落とす。
「言葉通りだ馬鹿！　つか、短気過ぎだぞっ、テメェ幾つだよ！！」
「ちょっと二人とも……」
京は半泣きで狼狽えていた。
そんな光景を見ながら早月はフィーネと火吹に対する評価を改めていた。
（フィーネさんって、見た目と中身が釣り合ってないな。銀のウェーブのかかった髪よりも、黒髪でポニーテールの方がしっくりくるかも。姫野さんは、結構良い奴だな。
それにしても、）
早月は京を見る。いや、その目は京ではなく、むしろその後ろを見ていた。そこには背が高く、浅黒い肌の女性がニヤニヤしながらフィーネと火吹の喧嘩を眺めている。
早月は首を傾げた。
今まで、京を見た時、あんなものが見えていただろうか？
（いや、何かが憑いてるように見えてはいたよな）
それにしても、ここまではっきりと見えるのは初めてだった。
そして気付く。
フィーネも、火吹も、京も、女も、そして、自分にも。体内に渦巻く『何か』がある。液体のような、気体のような。
すると、女が早月の方を振り向いた。
その表情は値踏みをするようで、かと言って早月はその表情をいつもと変わらない表情で見る。
女はそんな早月が面白くないのかつまらなそうにすると何かを呟いた。何を呟いたんだろうと見ていると、女は目を見開いて早月を見ていた。
早月はまぁ、いいかと女から意識を外して、喧嘩するフィーネと火吹、それにオロオロしている京を眺めながら昼食を再開した。

志賀早月〈6〉―困惑：Teasing―

放課後、喫茶『Workers』に向かいながらフィーネは再び早月について考える。

昼休みの喧嘩の時、早月は京の方ばかり見ていた。それも京自身ではなく、京の背後。

（やっぱり、『見鬼』？　でも、『霊視』であってもある程度の力があれば見えますからまだまだ、何とも言えませんわね……）

フィーネはふと、気が付く。

なぜ、ここまで早月のことを気にかけているのか。

（別に、これといって詮索されないなら放っておけば良いはずですのに……）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

疑問が解けないままにフィーネは喫茶『Workers』へと入った。

「いらっしゃい……ってフィーネか」

カウンターの向こうでライラは洗い物の手を止めずに顔上げた。

「ライラ……」

困惑した表情のフィーネにライラは苦笑する。

「あんた、まだ昨日のこと引きずってるの？」
その声はどこか呆れていた。
「わからないんですの。そのまま放っておけば良いはずなのに、マンティコアのことや、魔法のことまで……。それに、彼の能力の程度を確認しようと……」
「……あんた、喋ったの？」
フィーネは気まずそうに頷く。
「自分でも、信じられませんわ。確かに昨日、あなたに放っておけば良いと言われて、それを承知したはずなのに、朝になったら会わなきゃ……って。まるで、彼に恋慕を抱いてるみたい……」
フィーネは自分を抱き締めて小さくなり、その顔には頬に朱が差していた。
（可愛い過ぎだよフィーネ。えっらい、おいしそうじゃないか……）
まるで乙女な表情を浮かべるフィーネにライラは自重しろと自分を言い聞かせる。
「と、ともあれ、あまり一般人をこっちに入れるべきではないね」
わかってますわ、とフィーネはカウンターに突っ伏した。
「そんなことくらい。……なんでこんなに早月さんが……早月が、気になりますの？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「よっす」
「こんにちわ〜」
けたたましく扉が開き、火吹と京が入ってくる。
ライラは溜め息を吐いて火吹をたしなめる。
「火吹、お前はもうちょっと静かに入って来なさいよ」
「わりぃわりぃ、それよりコーヒーくれ」
火吹は悪びれもせずにカウンターに着き、コーヒーを頼む。ライラが呆れ顔でコーヒーカップに練乳を入れていると、火吹の隣に座った京から声が挙がった。
「フィーネさん？」
「ああ？」
火吹が京の見てる方を向いた。
カウンター席の端、入口に一番近い席。そこに、うんうん唸りながら突っ伏しているフィーネがいた。
普段の優美さを欠片も感じることが出来ない。
「……何してんだ、アイツは」
呆れ果てている火吹に対して京は心底心配そうにしていた。
「お腹痛いのかな？」
「まさか、フィーネは病とは無縁の奴だぞ？」
火吹の言葉にライラは悪戯を思いついた子供のように笑った。
「ンッフフフ」
「ライラ……」
「ライラさん？」
その笑いに火吹は苦笑し、京はキョトンとする。
火吹に練乳たっぷりのベトナムコーヒー、京にはソーダフロートを差し出しながら、この上なく楽しそうな声で二人にフィーネが突っ伏している原因を喋った。
「フィーネはね、今、『恋』という誰しもが患ってしまう病に冒されてる。それも、クラスメイトによ！」
「――っ、ライラッ！」

ライラの言葉にフィーネは飛び起き、
「ぶはっ！」
火吹は吹き出し、カウンターに突っ伏して、肩を震わせ、京は、
「フィーネさん、やっぱり病気なんだ……。大丈夫？」
本気で見当違いの心配をし、フィーネの元に駆け寄る。
そんな京にフィーネはどう答えるべきか困っていると、扉が再びけたたましく開く。
「こんちわっす！」
入って来たのは魅咲だった。魅咲はキョロキョロと見回し、フィーネを見つけると勢い良く詰め寄った。
「フィーネさん、フィーネさん、フィーネさんっ！」
「な、何ですのっ」
魅咲の勢いに気圧されるフィーネ。
次の瞬間、フィーネの顔が引きつった。
「朝のあのイケメンは誰っすか！？」
「な、なな……なんで魅咲が知ってますのっ！」
「なんでもクソもないっす。そんなことより早く教えてくださいっす。あのイケメンは誰っすか！！」
魅咲は目をギラつかせ、火吹とライラは腹を抱えて笑い、京は状況についていけずにオロオロするばかり。
「ああ、もう、何なんですのよっ！」
フィーネは叫び、ガックリと肩を落としてカウンターに突っ伏した。

志賀早月〈7〉―姦淫：Ａｎｇｒｙ―（前書き）

今回はちょいとエロめ

志賀早月〈7〉―姦淫：Ａｎｇｒｙ―

「フィーネさーん、いい加減教えてくれても良いじゃないっすか～」
なおも食い下がる魅咲。
火吹はニヤニヤとしながらフィーネを見ている。
「いいかい、京。恋ってのは心の病気なんだよ」
「心の病気？　えーと、う、う……あ、うつ病とかと似たような感じなの？」
「いや、うつ病なんかとは違うのよ。なんていうかな――」
と、ライラは京に恋について説明していた。
バンッ、とカウンターを叩きフィーネは顔を上げた。
誰もが驚き、フィーネを見て、固まった。
その顔が笑っていた。満面の笑み。そのはずなのに、全員の背筋が凍り付く。
「さあ、冬の慰安旅行の話をしましょう？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

今日はどうにも絡まれるな、と早月は嘆息した。
愛読している小説の続編購入のため、書店に寄った帰り。
一人は引っ詰め髪にタイトスカートのスーツ、つり目で厳しそう

な顔立ちの秘書を思わせる女性。もう一人は眼鏡をかけ、軽くウェーブのかかった亜麻色の長髪にベージュ系のカーディガンに淡いピンクのフレアスカートを着て、少したれた大きめの目で顔付きは連れとは対照的に優しく、近所に住むお姉さんといった印象を抱かせた。そんな二人が早月に色目を使いながら絡んできた。

「ねぇ、私達とイイコトしない？」

「損はさせないわよ？」

早月はそんな二人の誘惑を面倒臭そうに断った。

「いや、結構ですんで」

二人はニィ、と笑みを深めると早月の腕を掴んで路地裏に引っ張り込んだ。

「いっつ……」

乱暴に地面に転がされた早月は打ち付けてしまった右腕をさすりながら体を起こす。

二人は舌なめずりをしながら早月に熱っぽい視線を送っていた。

この状況に早月は何の感慨もなく思う。

（なんか、久し振りだな……何年振りだろ）

気が付けば、二人は服を脱ぎ出していた。辺りに誰もいないとは言え、ここは外であり、季節柄暗くなっていてもまだまだ宵の口にも入っていない。

そんなことを気にも止めず、二人は一枚、また一枚と脱いでいく。ついには下着まで脱ぐと、

「亜季（あき）」

亜季と呼ばれた眼鏡をかけた方は頷き、手を道路の方へと向けた。

早月は目を見開いた。

亜季から昼休みの時見えたものと同じ『何か』が急速に彼女の手の平に集まっていくのが見えた。

「【我、誰彼（たれかれ）を拒絶する者】

【形は円蓋】

【始点は其処の男の子に】

【終点は我に】
【通すは我と其処の郎女(いらつめ)】
【封じるは其処の男の子】
【拒絶するは他の誰彼】
【封断】」
早月は目視する。早月を中心とした大きく透明なドームが作られるのを。
そちらに気を取られてる内に早月はスーツを着ていた方に押し倒されてしまっていた。彼女は自分の秘部を早月の股間に押し付けて腰をくねらせる。
「ん……んふぅ……ん？」
悩ましげに吐息を漏らしながら早月の顔を見てつまらなそうな顔で立ち上がった。
「むぅー、何よ、何よ！　あたしより亜季が方が良いってワケ！？」
彼女と入れ替わるように今度は亜季が早月の上に跨る。
「ウフフ、彩夏(あやか)よりも私を選んでくれるなんて、おねーさん、嬉しいな」
言いながら亜季は早月に覆い被さった。

志賀早月〈7〉―姦淫：Ａｎｇｒｙ―（後書き）

状況は結構エロい感じなのに描写が全然……。まだまだ力不足だなあ……

志賀早月〈8〉―強襲：Ｌｅａｖｉｎｇ―

「ねえ」
突然、早月が喋ったことでキスを阻まれてしまったために亜季は頬を膨らまして早月を睨む。
見ていた彩夏はいい気味と呟き、亜季に睨まれて黙り込んだ。
「何よう～」
不満げな亜季を気にもせず早月は尋ねる。早月にとって、これから犯されようが何されようが関係なかった。問題は、さっき亜季がしたことただ一つ。
「さっきのは魔法？」
その質問に亜季は面食らい、彩夏の方を見たが、彩夏は面倒臭そうに肩をすくめる。そして、

「その通りさ」

答えたのは亜季でも、彩夏でもない第三者だった。
「誰っ！？」
亜季は立ち上がり、彩夏も亜季の方に近寄り警戒を始める。
そして、奇妙な音が、地面から聞こえた。聞こえた方を向くと早月も亜季も彩夏も唖然とした。
そこには人の頭の目から上だけがあった。
「……」
「……」
「……」
異常極まりない光景に誰も何も言えずにいると、頭が、ムクムクと生えてきた。
頭、肩、胸、腰、脚、足。
現れたのは亜季や彩夏に負けず劣らずの美女だった。

女は不適に笑っていた。
「武藤、」
「沙七衣……！」
亜季と彩夏は殺気も露わに身構える。親の敵でも見たような雰囲気だ。
女――武藤沙七衣（むとうさなえ）は不敵な笑みを崩さず、二人の殺気を真正面から受け、
「ぷっ」
噴き出した。
「あっはははははっ！　ぷふっ、ふひぃーっ、はははっ、は、腹捩れ……ぷふくっ！」
沙七衣は腹を抱えて笑いに笑い、バンバンとビルの壁を手で叩く。
あらかた笑うと息を整えニヤニヤと嫌な笑いを浮かべながら亜季と彩夏を見て、最後に早月を見た。
ニッ、と笑うと沙七衣は亜季と彩夏に指を突き付けた。
「そこの女の子みたいな男の子は私の獲物なんだから、そこの秋岡（あきおか）綾巻（あやまき）はテレクラでも何処でも行って別の男を探しなさい」
「嫌だね！」
「そうよっ、この子は私達のなんだからっ！」
早月の人権をまるで無視している発言を早月はまったく聞いていなく、彼はじっ、と沙七衣を見つめていた。
見ていたのは沙七衣ではなく、沙七衣から溢れる『何か』。沙七衣の『何か』は透明に澄み、なにものにも囚われない水のようだった。
沙七衣は早月に見せつけるように朗々と言の葉を紡ぐ。
「【Ｉ　ａｍ　Ｆｏｕｒ　Ｅｌｅｍｅｎｔｓ　Ｍａｎｉｐｕｌａｔｏｒ】
【Ｗａｔｅｒ　Ａｉｒ】」
沙七衣の言葉に亜季と彩夏は焦り、紡ぐ。
「ちっ

【我は儚(はかな)き者】」
「【我は誰彼を拒絶する者】」
しかし、沙七衣は早かった。
「【Ｆｒｅｅｚｅ】
【Ａｂｓｏｌｕｔｅ　Ｚｅｒｏ　Ｓｐｒａｙ】」
突然、亜季と彩夏の足元で水煙が上がり、凍てついた。
「ぅひゃあっ！？」
「つめ――痛いっ！？」
足が凍りつき、二人は一歩も動けないばかりか、氷はどんどん広がり、二人の脚を覆っていく。
「やばいやばいやばいやばいっ！」
「いやぁ～っ、全裸で道端に冷凍保存なんてイヤァッ！！」
あんまり恥ずかしすぎる末路を目前にパニック状態の二人をよそに早月は起き上がり、沙七衣に声をかけた。
「楽しそうですね」
「そういう君はどうでも良さそうだね」
さて、とどこか傲岸不遜に見える態度で沙七衣は早月に笑いかける。
「実は、私は前々から志賀早月くん、君に興味があってね」
「はあ」
「それに、ウチのフィーネや火吹、京が世話になってるようだしね」
早月は目を見開き、だから名前を知ってるのかと納得した。その一方で沙七衣の発言を訂正する。
「フィーネさんは、まあ、兎も角、姫野さんと上倉さんはそんなに親しい訳じゃ……」
「そんなことはどうでもいいさ」
「そうですか。それで、俺に何の用ですか？　そこの二人と同じなら別にそれはそれで良いですけど」
その言葉に沙七衣は鼻で笑う。
「はっ、そこの喚いてる馬鹿な変態達と一緒にしないで欲しいね」

それに亜季と彩夏からの突っ込みはなく、代わりに喚く声しか聞こえてこない。氷は二人の腹の辺りまで来ていた。
それを見て確かに失礼だな、と早月は納得する。
「それは失礼しました」
素直に謝る早月に沙七衣は満足気に頷くと、
「それじゃあ、まあ、はっきりと言おう。私はね、君を勧誘しに来たのさ」

志賀早月〈9〉―勧誘：Ｄｅｓｉｒｅ　Ｐｌａｃｅ―

「勧誘……ですか？」
「そう、勧誘。とりあえず、付いて来てもらうよ」
「え、ちょ……」
沙七衣は早月の腕を掴み歩き出す。早月は躓きながらもそれについて行く。
「置いてかないでっ、沙七衣ちゃんっ！？」
「えっ、あっ、ちょっとっ！？」
亜季と彩夏、二人の声は沙七衣に届かず、早月は苦笑だけを残して路地裏から去っていく。
「そんなっイヤァッ！」
「ウガァッ、アイツら、いつかっ、殺してやる～～～～っ！」
その後、脱出には三十分以上掛かったらしい。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……我が強いって言うのも考え物ね」
喧々囂々（けんけんごうごう）と言うよりはもはや喧嘩と言って良い意見の交換にライラはただただ嘆息するばかりだった。
「馬鹿を言うんじゃねぇぞ魅咲っ！　そんな警察気取りの米に行く

なんて正気の沙汰じゃねぇっ！」
「そっちこそ何を行ってるっすか！　アメリカは良いとこっす！　海外旅行っていったらアメリカっす！　グランドキャニオン、ナイアガラの滝、ハリウッドっ！　嗚呼、素晴らしきかなアメリカンドリーム！！
　大体、先輩のチョイスはおかしいっす！　ロシアって激寒じゃないっすか！　得体も知れないし、そんなとこ嫌っす！」
　言い合う火吹と魅咲にフィーネはキッパリと言い切る。
「アメリカもロシアも問題外ですわね」
「なんだとっ！？」
「聞き捨てならないっすね。先輩の意見も大概っすけど、フィーネさんの意見だって相当っすよ！」
「なんですの、魅咲！　その言い草はっ！　北海道の何が悪いんですのよ！　食べ物は美味しく、景色も悪くなく、小泉洋（こいずみひろし）に会えるかもしれませんのよ！」
　フィーネの言葉に火吹と魅咲、加えてライラまで溜息を吐く。
「な、何なんですのよっ！」
　三人共微妙な顔で顔を見合わせる。
「だって……なあ」
「そうすっねー」
「フィーネ……」
　ちなみに、小泉洋は北海道のローカル番組『木曜どうなんでしょうか』でブレイクしたタレントであり、今フィーネの中で最もきているタレントだった。
「なんか文句ありますのっ！？」
　フィーネが叫んだところで、京が突然声を上げた。
「そうだっ、僕ね、ネパールに行ってみたい！」
「……」
「あー……」
「おめぇよ……」

「京……」
京の発言になんと返したら良いか分からずに黙る四人と、どうしたの？　と素で訪ねる京。
ネパールと言えばチョモランマ或いはエベレストくらいにしか知らない四人はなんとも言えず溜息を吐く。と、丁度その時、入り口の扉が開いた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「さあ、着いたぞ」
早月が連れてこられたのはレトロ感漂う喫茶店だった。壁面の煉瓦は蔦に覆われ、扉は木製、扉の上の方を見るとそこにはホームベース型の木製の看板が吊られており、その看板には蟻のシルエットが描かれ、その蟻の上に筆記体で『Ｗｏｒｋｅｒｓ』と書かれている。
とりあえず引っ張られるままについて来た早月はあまり良い予感を感じていなかった。むしろ、面倒臭いことになりそうだと思っていた。
そして、扉を開けると、そこにいたのは見知った顔で昨日今日と妙に関わりのある人物達だった。
「あ」
「……は？」

「あ、早月くん」
「へあ、え、さ、早月っ？」
早月自身は沙七衣の言葉からなんとなくではあるが予想は出来ていたため大して驚くことはなかった。しかし、火吹とフィーネ、特にフィーネの混乱は酷かった。
「な、ななな何で早月がここにきますのっ！？　というか、何故沙七衣なんかと一緒なんですのっ！！
何っ、なんなんですのっ！？」
叫びながら顔を赤く染めるフィーネ。
そんなフィーネを見て、二人の唇が三日月を形作っていた。
それは、沙七衣とライラ。
彼女達は笑う、『やった、おもちゃを手に入れた』と……。

志賀早月〈１０〉―対面：Ｒｅｖｅｎｇｅ―

驚くフィーネを無視して沙七衣は早月を中へと招き入れ、
「ここは、ペット探しから、非合法な事まで正真正銘何でもございの何でも屋。
ようこそ、私の『Ｗｏｒｋｅｒｓ』へ」
「はぁ……」
早月は気のない返事をして自慢気な沙七衣に確認をとる。
「つまり、俺をその『Ｗｏｒｋｅｒｓ』に勧誘してるってことですか？」
早月以外の全員を置いてけぼりにしながら沙七衣は優雅に空いてるカウンター席に腰掛け、脚を組む。
「その通り。君の目は面白いし、珍しいからね。是非とも欲しい」
目と言われて思わず手を目元に伸ばす。
（『見える』ことってそんなに珍しいのだろうか？）
見えること自体はどうでも良いが、面倒事が嫌な早月にとって、沙七衣の勧誘は迷惑でしかない。フィーネと沙七衣の話を総合するとその面倒臭さは相当なものだろう。だから、早月はこの誘いを断る事に決めた。そう、沙七衣に言おうとして、
「ちょっと沙七衣っ！　これはっ、どう言うことかっ、説明なさいっ！」
なんとか驚きから立ち直ったフィーネに先を越されてしまった。フィーネの言葉に同意するように火吹も沙七衣に訪ねる。
「そうだぜ。大体見えるだけなら幾らでもいるし、見えたところで『力』がなけりゃ、この仕事はどうにもなんねぇだろ？」
火吹の正論。フィーネもそうだと頷く。だが、沙七衣は笑って命令した。
「黙れ。私が入れるっつったら入れるのよ」
滅茶苦茶な言い分だが、フィーネも火吹も黙り込む。その様子に

早月は今断わったら面倒事になる、そう確信し、黙っていることにした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

黙らせてからは早かった。あれから沙七衣は、
「それじゃあ、今日は酒盛りよ！」
そう言い出し、自分以外（早月含む）に料理の準備を命じた。
ボックス席に料理がどんどん並べられていく。
（……もしかして、俺は強制参加なんだろうか？）
思いながら、早月はこういうのもたまには悪くないかと準備に精を出す。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

北和町郊外にある廃工場。そこに、『彼女』と少女がいた。
「ようやく、見つけた」
少女は『彼女』に手のショートソードを突きつける。その刀身は青白く揺らめき、強烈な威圧感を放っている。
「パパと、ママの敵――っ！」
少女がショートソードを振ろうとした瞬間、トンッ、という軽い音。
そこに『彼女』は居なかった。
「どこよっ！」
左右を見ても、後ろを見ても、誰もいない。
『ガアァッ！！』
複数のうなり声。
聞こえた方向。上を見て、少女は慌てて飛び退く。しかし、方向が悪く、そこにはドラム缶の山。ドラム缶を蹴散らしながら転がる少女。
「あぐぅっ……」
少女は痛みに呻きながら降ってきた『彼女』を見る。
上半身は一糸纏わぬの亜麻色の髪の美女だが、残りの半身は怪物そのもの。
六つの首と十二の足を持つ巨大な猛犬。瞳をギラつかせ、涎を垂れ流し、唸る。
七対の瞳が少女を睨む。
「そっちから、来るなんて……」
『彼女』は酷薄な笑みを浮かべ少女に襲い掛かった。

志賀早月〈11〉―酒宴：Encounter―（前書き）

お酒は飲むのも買うのも二十歳を過ぎてからです。

志賀早月〈11〉―酒宴：Encounter―

目の前の光景に、早月は苦笑を禁じ得なかった。
「ザルか酒乱しかいないんですか、ここは」
手にしたウィスキーを煽りながらライラに尋ねると、やはり苦笑を浮かべる。
「あはは、ほんと、見苦しいとこ見せちゃって……」
「ぎゃはははっ！　マンティコア如きに手こずるとか、マジ有り得ねぇっ！　ウヒャヒャヒャッ！」
火吹は手を叩いてフィーネを笑い、
「～～～～～っ！　そういう火吹こそっ、魑魅魍魎程度の雑魚にこっぴどくやられていたのではなくてっ！！」
フィーネは火吹に反論し、
「にゃはははははははははははははは！」
魅咲はビール片手に笑い転げ、
「うにゃ～～～～」
京は猫のような声を上げ、
「うんうん、京は本当に可愛いね」
沙七衣は京を膝に乗せて猫可愛がり。
何とも騒がしい。
その騒がしさを聞きながら、早月は尋ねる。
「あの、」
「ん？」
「本当に俺、入らないといけないんですかね？」
沙七衣の意図がわからなかった。早月はただ『見える』だけ。それ以上だなんて素振りは沙七衣に見せた覚えは無かったし、何より沙七衣とは初対面だ。
ライラの答えは、何とも早月を脱力させるものだった。
「さあねぇ……。うちの姫様は我が儘だからね」

「……面倒事は勘弁して欲しいんだけどな」
何とも言えない表情で早月はグラスを煽った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

少女は屋根から屋根へと、飛ぶように駆ける。
月夜に照らされるその様は、少女の容姿と相まって神秘的だった。
しかし、少女の身にはボロ切れが申し訳程度にしかついてなく、白磁のように白く美しいはずの肌は肩から止めどなく流れる血で赤黒く染められ、内出血しているのか肌の所々がどす黒く変色している。
息も絶え絶えだった。
（あんなに……強い、なんて――っ！）
『彼女』の強さに、少女は唇を噛む。
圧倒的だった。
悔しい。
負けては、いけないんだ。
そんなことが頭の中を駆け巡る。
目に、光が宿る。
負けない。
しかし、限界だった。
体は悲鳴を上げ続け、跳躍に力が無くなっていく。

視界が狭まる。
そして、
「あ……」
足を踏み外した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

あれから少し、火吹は酔いつぶれ、沙七衣は魅咲と京を抱いて三人一緒に床に転がって寝ていた。
残った早月、フィーネはカウンター席に座り、ライラはカウンター内で紫煙をたゆらせていた。
「しかし強いね、志賀くんは」
「いや、そんな……あ」
早月は時計を見て、固まる。
「ん……、どうかしましたの？」
尋ねるフィーネはホロ酔い加減に頬は朱に染まり、目は潤み、火吹との言い争いのせいで着衣が若干乱れていた。大層艶やかな姿だが、早月は気にすることなく立ち上がり、鞄を肩に掛ける。
「もう時間が時間ですから、帰ります」
そう言って入口に向かおうとした早月の手をフィーネは思わず掴む。
「フィーネさん？」

引き留められた早月は不思議そうに首を傾げ、ライラは驚きに目を見開いて二人を見る。
「え……あ……っ、な、何でもありませんわっ！」
フィーネは慌てて手を放し、顔を真っ赤にしながら誤魔化すように手を振る。
「？　それじゃあ、フィーネさん、また明日。それと、勧誘の件ですけど、お二人から断っておいてください」
じゃあ、と言い残して、早月はＷｏｒｋｅｒｓを出る。
店先で携帯を見ると母親からのメールが十件、着信が二十四件、留守電が四件。
一番新しい留守電を確認してみると、連絡が無いこと、自分をほっとくなという旨の文句が延々と入っていた。
早月は苦笑し、
（何か、つまみとか良い酒でも買ってご機嫌取りしないとな）
行きつけの酒屋へと足を向けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

大吟醸『朱金泥能代（しゅこんでいのしろ）』の一升瓶とつまみ数種類が入った袋を片手に、早月は固まっていた。
家は目と鼻の先、というより、あと一歩あれば家なのだが、早月は入ろうとしなかった。いや、むしろ入れなかった。

玄関前に横たわる少女。年の頃は十四、五歳程。身長は早月より頭一つ低いだろう。髪は長くプラチナブロンド。顔立ちは日本人ではなく、ヨーロッパ系。そして、何よりも早月を固まらせたのはその少女の状態だった。

申し訳程度にボロ切れが体についていて幼い胸や秘部が半分以上露わになり、衣服の意味をなしていない。その上、体は血塗れで、抉られたような傷や打撲で本来なら目を見張るほどに綺麗であろう白い肌が赤や黒に染められている。

少しして、早月は我に返り少女に駆け寄った。

志賀早月〈１１〉―酒宴：Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ―（後書き）

一話一話が短いかなと思わなくもない今日この頃。
展開が極めてダラダラしてますが取り敢えず起承転結で言うならやっと起が終わるかな？ってとこです。
ちなみに、このあとはしばらくラブコメ？展開になってきます。
今日の５の２を見てると癒されるなぁ……。

志賀早月〈12〉―処置：Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ―

フィーネは早月が出て行った入口を物憂げな表情で見つめる。
その表情はどう見たって恋する乙女だった。
（あー、こりゃマジだな……）
ライラは茶化す連中が寝てて良かったよ、とどこか安堵の表情を浮かべ、フィーネの相手が　沙七衣に狙われていることに思いあたり、
「……取り敢えず、飲むかな」
一気にグラスを煽った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

早月は少女を自分のベッドに寝かせ、応急処置を始めながら深い溜息を吐いた。
（……なんで母さんには見えないんだ？）
少女を見つけ、息があることを確認し、一先ず母親を呼んだのだが、母親は、
「ぷう、何言ってるんだよー、早月ちゃん。そこに女の子なんていないよー。それより、遅くなるならなるって連絡くらいよこせよー。寂しかったんだぞー。お仕置きなんだからなー」

と腕を振り回してポカポカと早月を叩き出した。
疑問に思いながらも買ってきていた『朱金泥能代』とつまみを渡し、ご機嫌をとり、現状の把握に努めた。
出た結論は恐らく少女は自分にしか見えておらず、病院に連れて行くこと、さらには救急車を呼ぶことも無意味。何よりも少女自身は幽霊や妖怪なんかの類ではない上、その傷は酷く、一刻も早い処置をしなければならないということだった。
母親を無視して少女を抱え上げると、少女のいた場所は血で染められ、母親は悲鳴を上げて家の中に逃げ込んでいった。
その光景に苦笑しながらも少女を自分のベッドにまで連れて行ったのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

応急処置を終えると制服が血塗れになっていることに気付いた。
「これ……」
早月は苦笑して、寝間着に着替えた。
そして、制服を持って洗濯機のある洗面所に向かおうとしたところで少女が呻いた。
「……うっ……あぁ……あ？」
慌てて駆け寄ると少女は小さく身じろぎ、ぼんやりと早月を見る。
「……だ……れ……？」

「俺は志賀早月。君は、俺の家の前で倒れてたんだよ」
応急処置しか出来てない状況を打開するために早月は間を置かずに話していく。
「君は俺にしか見えてないみたいでね。応急処置しか出来ないんだ」
早月は恐らく、と考えてさらに問いかける。
「君が何かしたんじゃないか？　自分が見えないように」
少女は弱々しく頷く。
「なら、今すぐ見えるように出来るかい？」
少女は頷き、小さく呟いた。
また、『何か』が見えた。
今まで見たものよりもずっと弱々しく、揺らめいた。
「……これ……で……大丈……」
少女はそのまま意識を失った。
そして、早月は小走りで母親を呼びに行った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フィーネとライラは寝扱ける四人に溜息を吐きながら後片付けをしていた。
「いつも思うのですけれど、弱いならもっと自重して然るべきではありません？」
「言ったところで聞きゃしないでしょ。いい加減慣れないとね」

諦観の表情で語るライラに、フィーネは溜息を吐き、止まった手を再び動かす。
少しすると、入口が開いた。そこから現れたのは長身の少し骨ばった和服姿の男。目は細く、黒い髪は軽く目にかかる程度の長さ。顔立ちはそこそこに整っていた。
足元には旅行トランクが置かれている。
その表情は疲れ切っていた。
「おかえり、和真」
「おかえりなさい、上月」
「ただいま……というか、ただでさえ疲れてるっていうのに、何社長に酒飲ませてるんですか」
男――上月和真（こうづきかずま）は呆れながらカウンター席に着いた。
ライラはフィーネに残りの後片付けを任せながらカウンターに戻って和真にお茶を出す。
そして、お椀にご飯を盛り、出汁とお茶を準備し、鮭を焼きながら和真に尋ねる。
「で、ヨーロッパでの仕事はどうだった？」
和真はうんざりとした顔で答える。
「どうもこうもないよ。向こうの連中はプライドばっかり高くてね、七面倒臭かったよ。それより――」
和真の表情が変わった。
どこか緊迫した雰囲気にライラは顔を上げて和真を見、フィーネも手を止めて耳を傾けた。
「ギリシアのキルケの一族が失踪したらしいよ」

志賀早月〈13〉―秘密：Ｋｎｉｇｈｔ―

早月の母親、志賀弥生（しがやよい）は顔をしかめながら包帯を巻かれた少女を見た。

その手には早月が持ち出したものよりも大きな救急箱。

「ヘタクソー」

「ヘタクソ言われても、包帯全身に巻いたことなんてないし」

早月は困った顔で弥生に反論するが、弥生は歯牙にもかけず、慣れた手つきで少女の包帯を解いていく。

妙に手際が良い。

早月はそのことに首を傾げながら弥生と少女を見つめる。と、弥生が白い目で早月を見つめていた。

「？　母さん、どうした？」

「エッチー」

またも一言。

何が、と考えて少女は包帯以外身に付けていなかったということに思い至る。

しかし、包帯を巻いたのは早月であり、今更、なのだが早月は反論したところで無駄だなと諦め、すごすごと部屋から出て行った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

キルケの一族はギリシア神話に出てくる魔女、『キルケ』が起源とされている魅了・変化の魔法に特化したギリシアに住む一族であり、中でも精霊たるニンフを使役し変質させた『スキュラ』は使い魔として強力であり、醜悪だった。キルケの一族はこの『スキュラ』だけでその地位を得たといっても過言ではない。

そんな、大きな力を持っているはずの一族の行方不明は大きな波紋を呼ぶ。それはギリシア国内に止まらず、遠く日本にまで及んでいた。

『騎士』とあだ名される白いロングコートを着た白人の大男ベルナルド・ルスティエは半壊した廃工場に佇みながら、忌々しげに煙草を噛み潰す。

「どいつもこいつも……」

ベルナルドは煙草を地面に吐き捨て踏み潰すと、コートを翻してその場を去っていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「しばらく安静にしていれば大丈夫ー」

居間に移動すると弥生は早月が買ってきた『朱金泥能代』を開ける。

テーブルにはすでにお猪口とつまみが用意されていた。

早月はいつの間に、と思いながら母親の顔を見る。
いつもと変わらない。
早月から見た弥生はやる気がなさそうにしているくせに割と何でも器用にこなし、その一方で息子を偏愛してやまないダメなのか良いのかよくわからない母親。
それはさておき、早月は弥生の手当てが妙に手慣れていたことが気になった。
「母さん、随分と手当てが手慣れてたね」
「それよりも、早月ちゃんも飲めよー」
「むぐ」
弥生は問答無用につまみのビーフジャーキを早月の口に突っ込み、お猪口に酒を注ぐ。
そんな弥生に早月はまったく、と呆れて見せるとお猪口を一気に煽る。
「わかったよ。でも、その内理由を聞かせてよね」
うん、と弥生は申し訳なさそうな、悲しそうな顔で頷いた。

志賀早月〈１４〉―目覚め：Ｔａｇ―

少女は目を覚まし、ぼんやりとした頭のまま辺りを見回す。
それは見覚えのない部屋だった。
（ここ、どこ？　私一体……？）
部屋の戸が開く。
その音に少女は飛び起き、構える。
『だれっ！？』
「？　何を言ってるのかはわからないけど、ケガ、もういいの？」
そこにいたのは驚いた表情の早月だった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「えっと、その……ありがとうございます」
少女は申し訳なさそうに、日本語で頭を下げる。
やけに流暢な日本語だった。
そのことに感心しながら、早月は椅子に腰掛ける。
「さすがに家の前で倒れられたらね。それで、本当に体は大丈夫？」
「はい、それはもう」
早月はそれはよかった、と頷きながら、昨日の少女について思いをはせる。

昨日、この少女は早月にしか見えていなかった。
そして、少女が何かを呟いたことで早月以外にも見えるようになった。
それだけではなく、先ほど少女が身構えた時に少女から昨日フィーネや自分に見えた『何か』を見た。その雰囲気は早月を襲った二人や沙七衣が魔法を使った時によく似ていた。
「それにしても、僕以外に姿が見えなかったり、ケガが治るのが早かったり、まるで魔法みたいだよね」
「……そうですね、自分でも驚きです」
少女は何かを誤魔化すように答えた。
早月は、それに対して何か言おうとしてやめた。
（らしくないな……）
早月は何かを振り払うように首を振り、少女に尋ねる。
「そういえば、君の名前を聞いてなかったね」
少女はしばらく考え、答える。
「ヘカテー。ヘカテー・ペルセイス」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ほんっとにもう、何なんですのっ！？」
「あんたさ、本当にあたしより年上？」
深夜。この時期、北和町の郊外にある香鷺山（こうろさん）は霧が立ち込め、日

中だとしても薄暗いことが多い。そのため、北和町の住人は『オバケ山』などと呼んでいた。
そんな中、二人は逃げ出したニンフを追っていた。
一時は確保寸前までいったのだがそこで捕り逃した挙げ句に、ニンフはフィーネをからかうのをいたく気に入ったのか、おちょくるように香鷺山まで逃げてきたのだった。
『アハハハ』
人を小馬鹿にしたような笑い声。
木のうろから浮かび上がったのは緑色の淡い光を放っている十一、二歳ほどの年齢の無地の白いワンピースを着た少女。
「いい加減大人しく捕まりなさいっ！！」
時間は深夜である。しかも、山道から外れた場所。
当然、明かりなど一つとしてなく、ましてや霧のせいで月や星の明かりも届かない。
しかし、それでもフィーネはまるで見えているかのように素早くニンフに近寄る。
「捕まえ――」
フィーネの腕は空を切る。
ニンフは霧の中へと消えて再びフィーネの背後へ。そして、
『アッハハハハハ！』
爆笑。
ニンフの少女はフィーネを指差し、目に涙を浮かべながら爆笑しだした。
「いやあ、馬鹿にされてるねー」
ライラはフィーネに対してしみじみと言った。
まるで他人事のようなライラの発言にフィーネのの唇の端がピクリと引きつる。
「ライラ……。あなたね、何もしてないじゃないのっ！　あなたがすぐにでもニンフを拘束してくれたらもっと早く、帰れますのにっ！」

「そうは言ってもさ、私の『【Ｂｉｎｄ】』は人外でもあのニンフみたいに肉体を持たない相手にはあんまり効かないのよ。知らなかった？」
「知りませんっ！　大体、ニンフを拘束できない封魔士なんて聞いたことありませんわっ！」
ライラは呆れたようにため息を吐いた。
「そんな封魔士はね、とっくの昔にいなくなってるよ。情報収集くらい、しときなさいよ」
「うぐっ。そ、そんなのっ、あなた方封魔士の怠慢じゃないのっ！」
「時代は常に移ろい行くものなのよ。大体、何のために深夜帯の依頼をあんたがやってるのか思い出してみなさいよ」
「……そうです、そうですわ。うっかり忘れていました」
フィーネは口角を思いっきり吊り上げた。
「くっ、ふふふふふ。私としたことが、いけませんわね」
ライラは、あれ？　と思う。どうにも雲行きが怪しい。
（何か、まずいことは……言ってない、わよね）
「ニンフ程度、などと高をくくっていたのが間違いでしたわ……」
そう言いながら二本のナイフを取り出し、自分の背中を、腕を、腹を、掻き切った。
その行為にライラは顔をひきつらせる。
「ちょっ、フィーネ、あたしはそんな意味で言ったわけでは……！」
『！？』
ニンフはと言うとフィーネの突然の自傷行為に目をむく。
一陣の風が吹き、霧が掻き消える。
赤い月がフィーネを照らす。
「私をおちょくったこと、後悔させてあげますわ。
【Ｍｙ ｂｌｏｏｄ ｉｓ ｃｒｅａｔｉｏｎ ｉｎｖａｄｅｒ．Ｉ ａｍ Ｉｍｐｅｒｉｓｈａｂｌｅ Ｑｕｅｅｎ．Ｉ ａｍ Ｋｉｎｇ ｏｆ Ｎｉｇｈｔ！】」
それは、呪文ではなく宣言。

溢れ出ている血は勢い良く噴き出し、フィーネを紅く染める。
次第に、フィーネに変化が現れる。
髪が、耳が、目が、歯が。
ニンフは理解する。
自分が何をからかっていたのか。
それは圧倒的な存在。
恐怖に駆られ、一目散にその場から逃げ出す。
ごめんなさい。
ひたすらにそれだけを叫びながら。
目には涙を浮かべて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3062c/

Ｗｏｒｋｅｒｓ

2010年10月21日20時35分発行